

エコミュゼの運営における管理システムと機構形態
に関する考察：
ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エ
コミュゼのケーススタディ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 宏之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8732

研究ノート

エコミュゼの運営における管理システムと機構形態に関する考察

——ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼのケーススタディ——

A Study on Structural Form and Supervisory System of Ecomusée Administration

——A Case Study on the Urban Community of Le Creusot Montceau-les-Mines Ecomusée——

石川 宏之*
Hiroyuki ISHIKAWA

1.0 本稿の目的

我々は、人が人や自然と共生する持続可能な世界を目指すために地域社会において歴史的遺産を守り、世代間を越えた文化的な営みが必要とする。その試みの一つとして博物館¹⁾は、社会によって創られ、地域と関わりを持つ機関である。そして地域問題に対処し、地域を生かし、さらに地域に影響を与えていくものと考えている。

博物館が地域社会のニーズに応えるには、博物館の機能を活かした新たな事業を展開することである。しかしそれを行うにあたり博物館側の課題は、その事業を企画する人材の不足、運営資金の不足、旧体制における運営の支障等である。これらの課題に対処するためには、博物館が地域住民とパートナーシップを組む新たな管理システムのネットワークを築くことである。したがって博物館研究は、博物館をめぐる地域社会の視点から博物館活動を捉えた調査により、博物館運営について明らかにすることを求められる。

今日エコミュゼ (écomusée)²⁾は、地域住民が博物館活動に携わり、創造し、記憶とふれあう場として注目されている。また地域を活かしその将来を準備する一つ的手段として役割を担っている。よって本稿では、フランスの都市部で活動するエコミュゼの実態を把握し、地域における博物館の役割や博物館活動を活性化させる運営方法を明らかにする。そして日本の都市におけるエコミュージアムを運営するうえでの手がかりを得ることを目的とする。

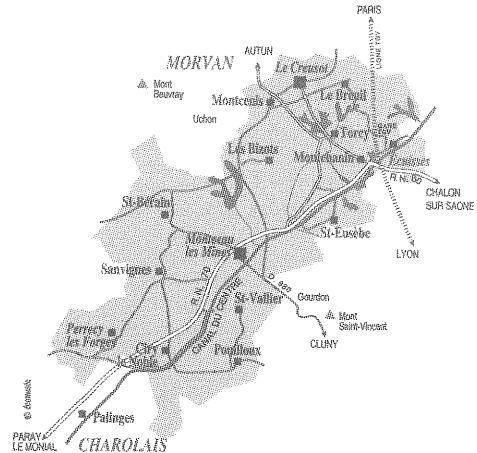


図1 ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体

1.1 考察の方法

エコミュゼは、その地域・時代によって異なり常に変化していく。したがってエコミュゼの博物館運営は、今日の地域社会と時代背景の関わりの中から明らかにされることを必要とする。

方法としては、まずフランス全般においてエコミュゼの運営における管理システムや機構形態の特性を歴史的経緯の中で明らかにしたい。

つぎにエコミュゼの事例を考察することにより、その運営がどのように社会的な働きをしているか、具体的に地域住民や地方自治体との取り組みの中から明らかにしたい。

そして最後に日本における地域社会の現状と照らし合わせて、エコミュージアムの役割やその運営方法となる手がかりを求めてみたい。

*横浜国立大学大学院・工学研究科

1.2 調査概要

手法としては、エコミュゼの現博物館専門職員にそのエコミュゼ全体における博物館活動や運営方法について聞き取り、さらに市民団体の代表者にその博物館活動の現状について聞き取り調査を行った。³⁾

調査期間は1997年6月26日～28日である。⁴⁾

1.3 調査地の選定

調査地は、フランスのル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体⁵⁾にあるエコミュゼ(L' Ecomusée de la Communauté urbaine Le Creusot Montceau-les-Mines)とした(図・表1)。選定理由は、このエコミュゼが都市部にできた最初のエコミュゼであること、および後に誕生する多くのエコミュゼがその運営方法を真似て取り入れたからである(Joubert 1996, p. 33)。

2.0 エコミュゼの概念と歴史

はじめにエコミュゼの概念について紹介する。エコミュゼの概念はフランスで生まれた。エコミュゼとはécologie(生態学)とmusée(博物館)からなる造語である。エコミュゼの「エコ(éco)」という言葉の由来は、ギリシャ語の「オイコス(Oikos)」からきている。「オイコス」は「家」を意味する。そして「家」というのは、何人かの人がそこで一緒に暮らす。つまり「オイコス」は、「家族・家庭」も意味する。したがってエコミュゼは、人が住む環境界

(milieu)⁶⁾と、人がそれを保持している諸関係を自らのプログラムに組み入れた博物館である。

2.1 エコミュゼの誕生

つぎにル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼの前史について述べる。

1968年アモリック地方自然公園(Parc Naturel Régional)⁷⁾内に「ウェッサン島の技術と伝統の家」が誕生した。それは後にエコミュゼと呼ばれるようになり⁸⁾、その地域の農業が落ち込んできたため、地方自然公園を手段としてその地域の自然遺産・文化遺産を観光業へ結びつけ、その地域に再び脚光を浴びさせようという意図でできたものである。

1960年代後半から70年代前半にできたエコミュゼは、地方自然公園のサービス部門として位置づけられていたが、博物館運営における権力の集中等で支障をきたしていた。そうしたなか新たなエコミュゼはつきなる運営方法を模索していた。

2.2 ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼの設立経緯

1960年代この地域の石炭が枯渇し、重工業に関わる地場産業が衰退し、その会社は多くの労働者を解雇した。1970年に各コミューヌ⁹⁾は、将来の経済的な困難を予測し、互いに協力した方が賢明であると考え、ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体を発足させた。この都市共同体は、ル・クルゾーとモンソ・レ・ミーヌの2つのコミューヌを中心とした計16のコミューヌから成り立っている。

	人と産業の博物館	学校の博物館	産物の博物館	ロマネスク様式の教会	化石の博物館	合計(人)
1月	228	—	—	—	21	249
2月	574	—	—	—	19	593
3月	1150	—	03	—	167	1410
4月	2363	52	435	—	78	2928
5月	2695	431	792	—	429	4547
6月	2550	574	1080	—	230	4434
7月	1827	84	938	136	96	2831
8月	2381	124	1048	125	133	3811
9月	2138	125	617	119	156	3155
10月	1880	66	214	—	35	2231
11月	1350	46	51	—	42	1489
12月	608	26	2	—	14	650
合計	19062	1528	5047	380	1420	28337

表1 1996年入館者数

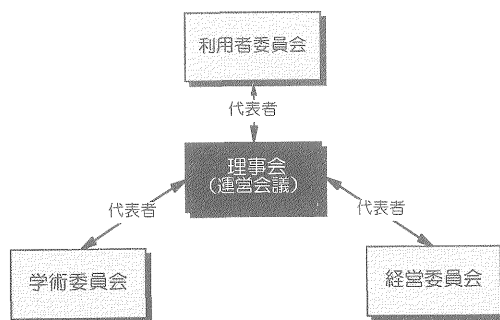


図2 管理システムにおける権力の分散化

この都市共同体の議員は、ジョルジュ・アンリ・リヴィエール (Georges Henri Rivière)¹⁰⁾、ユーグ・ド・ヴァリン (Hugues de Varine)¹¹⁾、マルセル・エブラード (Marcel Evrard)、の三者へ話を持ちかけ、1974年にル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼを設立させた。

彼らは、まずル・クルゾーに博物館を計画し、それが単なる建物でなく地域に埋もれている文化遺産や産業遺産を掘り起こし、今日の人々にそれらを見直してもらえるダイナミックな文化活動を提唱した。なぜならこの地域住民は、地元企業によって社会的・文化的な制約を受け続けていたからである。このエコミュゼは、それを解放するためにグローバルな文化的開発を行う手段として位置づけられた。そして実験的に「自然」環境とともに「社会」環境も活かす博物館活動を展開したのである。

3.0 ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼの特性

はじめにエコミュゼの理事会が行う運営会議の管理システムについて述べる。そしてそのシステムから近年このエコミュゼの機構形態が変更された意味を明らかにしたい。

3.1 運営における管理システム

(1) 運営会議を行う理事会の構成

このエコミュゼの特徴は、地方自然公園内にあるエコミュゼのように純然な農業地帯、もしくは

地方自然公園にも含まれていないことから、ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体の行政区域を博物館活動のテリトリーとするアソシアシオン¹²⁾として設立されたことである。そして地方自然公園での運営上の問題点を考慮し、3つの委員会(利用者委員会・学術委員会・経営委員会)に権力を分散させた管理システムを取り入れたことである。そして運営会議を行う理事会の評議員は、各委員会の代表者で構成された(図2)。その中に、各地域で博物館活動を行っているアソシアシオンの代表者とそのコミューヌの代表者、国の文化省の派遣代表者、ブルゴーニュ地域圏会議長、ソーヌ・エ・ロアール県知事、ソーヌ・エ・ロアール県議会議長等の28名で構成されている。

(2) 協約による機構形態への変更

ジョルジュ・アンリ・リヴィエールは、まず中核博物館 (lieu central) をつくり、そしてそのテリトリー内にアンテナ (antenne) ができ発展していくと考えた。ただしアンテナの運営は中核博物館に依存している。以前このエコミュゼは、ル・クルゾーにある「人と産業の博物館」を中心に、ローカルなアンテナが従う形態であった(図3-A)。しかし今日協約という形式をとることで各々の博物館が対等なパートナーシップを組む連合体へ変更された(図3-B)¹³⁾

またこの間にエコミュゼ・各アンテナで活動するアソシアシオン・コミューヌの三者は、協約を結びアンテナの運営において各々の役割と責任を決めた。そして各地域のアソシアシオンがその活

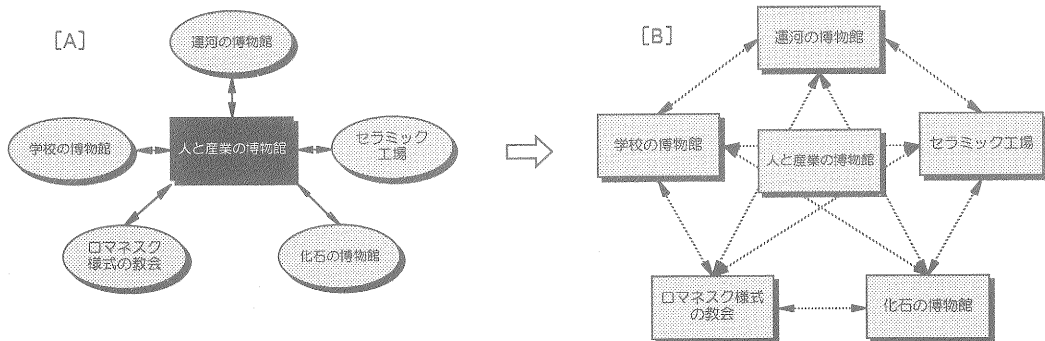


図3 機構形態の変更

動を行う権限について明確にした。

(3) 考察

この協約は、各アンテナの運営において三者に権力を分散し、各々の権限を明確にしたことで、各アソシアシオンの自立性を助長させることになったと考えられる。その後各アソシアシオンは、運営に責任を持てるようになり、独自で調査活動を行い、自分たちの文化遺産を積極的に見いだすことができるようになった。¹⁴⁾そしてかつてのアンテナは、調査・研究、収集・保存、展示・教育活動を行える博物館として社会的に認められた。つまりそれが機構形態の変更を意味することとされる。

ジョルジュ・アンリ・リヴィエールがエコミュゼの概念を主張してから時が経ち社会も変わってきた。エコミュゼは既存の制度にとらわれることなく、その時代や地域に対応するように努めることが大切であると考えられる。

3.2 博物館活動におけるパートナーシップ

今日のル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼは、6つの博物館の連合体である¹⁵⁾。これから事例をあげエコミュゼやコミュニエヌが各地域のアソシアシオンに支援する実態からそれらの機構における社会的な働きを明らかにしたい。

(1) 「人と産業の博物館」

この建物は歴史的記念物であり、1970年にル・クルゾーにより買い取られた(図4)。よってこの土地と建物はコミュニエヌのものである。中



図4 人と産業の博物館

には、ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼの事務局と「人と産業の博物館」がある。この博物館の常設展示は、この地域住民の生活を中心とした産業に関するテーマを扱っている。特別展示ではフランス国内外に関わらず広い範囲のテーマを扱っている。

「人と産業の博物館」には、独自に運営するアソシアシオンが無い。なぜならここはエコミュゼの博物館専門職員が直接管理しているからである。

(2) 「運河の博物館」のアソシアシオン

1990年にこのアソシアシオンは発足した。その目的は、中央運河の発展に寄与することである。そして今日このアソシアシオンは、「運河の博物館」の管理と中央運河における船の遊覧を行っている。会員は約400人である。

昔「運河の博物館」の建物は、中央運河の水門管理小屋であった。中の展示室には、中央運河に関する資料や地元の瓦工場でつくられた瓦を展示してある。そして隣りにある運搬船は、内部を一部改修して船の歴史・船と人の活動を展示してある(図5)。

エコミュゼは、これらの展示製作にあたって技術指導を行っている。例えば「運河の博物館」の展示に人形を置きたいという相談があった。博物館学の観点から人形を置く場合には、衣装を展示する時や仕事の動作を見せるときに使われる。こうして双方が展示について議論をすることで互いに理解し合い、事業を活性化することができる。

(3) 「学校の博物館」のアソシアシオン



図5 運河の博物館

1994年にこのアソシエーションは発足した。その目的は、「学校の博物館」の運営を通じて高齢者が子どもたちに話す機会を提供することである。アソシエーションの主な活動は、学校の先生と協力して学童を対象とした催し物の教育プログラムをつくったり、19世紀に書かれたテキストの読書会やその当時の遊技を实践した特別企画を行っている。そして学校団体の生徒が、年間約1000人訪れている。

展示は、学校教育の歴史を19世紀末、20世紀半ば、今日の3つの時期に分けて教室の様子を再現している。この会員は、約70人で、中に教職経験者が多く積極的に活動している。そして現在5人のスタッフが展示解説を行っている。

コミュニヌやエコミュゼは、アソシエーションに対し博物館の維持管理を支援している。例えばエコミュゼは、このアソシエーションの広報活動を行っている。またコミュニヌは「学校の博物館」に常勤職員を派遣し、その人が受付を行っている。他にコミュニヌは、「学校の博物館」の建物を所有しており、その光熱費を支払っている。

(4) 考察

ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼは、一つの社会システムであると考えられる。そのシステムとは、テリトリー内に点在するテーマ博物館が各々発する複数の情報を相互に共有し、独自の博物館活動に還元する組織体である。そして各地域のアソシエーションにおける博物館活動に独自性を持ちながら有機的に関係し合

える機構であると考えられる。

3.3 自治体とエコミュゼのパートナーシップ

つぎにエコミュゼが博物館活動によって地域問題に取り組む実態からエコミュゼの管理システムにおいて社会的な役割を明らかにしたい。

(1) 失業者の雇用対策

このセラミック工場は、1893年に建てられ1920年代の最盛期を向かえたが、1967年に閉鎖された(図6)。

エコミュゼは、1995年にこの工場を購入し建物を修復する一方この都市共同体の雇用促進局と相談したうえで失業者を雇用している。1996年にエコミュゼは、12人の若者を雇った。その若者たちは、麻薬の経験者や職業教育を受けていない人々であった。若者の職業上における再教育は、エコミュゼと雇用促進局の共同で行っている。

(2) 歴史的建造物の保護政策

エコミュゼは、この地域に点在する歴史的建造物の保全活動に関わっている。

1970年頃エコミュゼは、クルゾーの歴史的建造物を残すため国へ歴史的記念物に指定するよう働きかけた。この建造物は、1850年頃機関車を製造する工場として建てられ、建築史的な観点から近代建築として組積構造から鉄骨構造に変わる過渡期の様子を象徴しているものである。外壁が煉瓦で覆われており、鉄骨構造で大空間を生み出している。そして今日歴史的記念物に指定され、ディジョン大学教養部の付属図書館として生まれ変わった。1階は読書室でその一部にクルゾーの

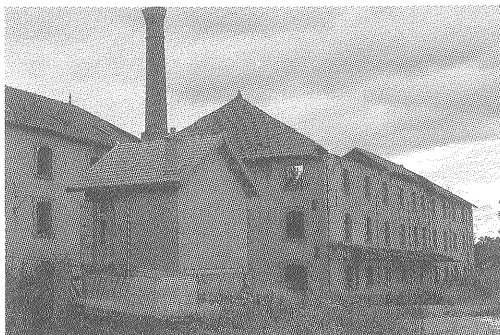


図6 博物館に再生されるセラミック工場

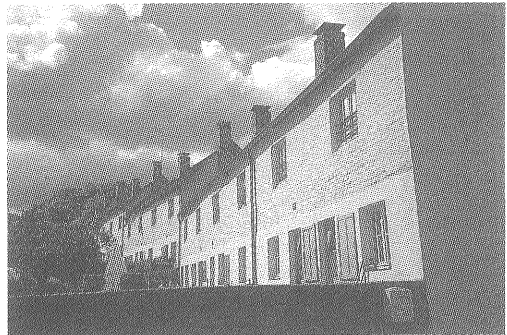


図7 保全された工場労働者の集合住宅

歴史について展示する予定である。

この住宅は、1826年に工場労働者のために建てられた(図7)。これは、19世紀の住宅様式が残り、この地域の歴史を語るうえで貴重な遺産であるが、1970年頃破壊の危機に瀕していた。そこでエコミュゼは、ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体へ働きかけ、その結果都市共同体が建物と土地を買い取り改修を行うに至った。そして、その建物外部は19世紀の様子にとどめ、内部は今日の生活に支障がないように居住者の要求に合わせ改修された。今後エコミュゼは、現在倉庫の上にある空き部屋を活用して労働者住宅に関する展示を行う予定である。

(3) 考察

ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼは、歴史的建造物を博物館として活用するばかりではなく、従来の機能を活かした保全活動も行っている。そして当機関における調査・研究機能を活かし、積極的に地域に点在する歴史的建造物の保全に努めている。また古い産業遺産を博物館として活かす場合でも、地域住民にその構想段階から参加を求め事業を展開している。

エコミュゼの教育活動とは、各地域のアソシエーションとパートナーシップを組んで展示活動する行為そのものと考えられる。そしてエコミュゼは、こうした活動を通じて歴史的遺産を破壊の危機から守り、失業者の雇用に貢献し、さらに市民活動の出会いの場を広げてきたと思われる。

この様な博物館活動を行える背景には、エコミュゼが自治体やアソシエーションの会員と密接に連絡や協議できる運営会議を持ち、それを有効に働かせているからと考えられる。またそのアソシエーションの会員になることが、常に何人にも開かれているからだと考えられる。

このエコミュゼは、今日まで平穏に來られた訳ではなく紆余曲折があったと推測する。つまりそれは地域住民との考え方のぶつかり合いや、中央官庁にエコミュゼのアイデンティティを認めてもらうことであった。そしてその板挟みの中で博物館の考え方をもちながら自治体や地域住民の要求

に応じてきたと考えられる。したがって今日地域社会に求められる博物館像とは、まさにこの姿であると思われる。

4.0 日本の都市におけるエコミュージアムの役割

以上フランスのエコミュゼについてみてきたが、最後に日本の事情について考えてみたい。

今日の都市部における課題は、持続可能な地域社会づくりに向けて新たなコミュニティを創出することである。¹⁰⁾そうした状況の中で博物館は、地域に次世代へ伝えるものを保存し、展示を含めた教育活動を実施し、そのための調査・研究活動をするを役割とした機関としてつくられた。

今後求められる博物館は、古典的な博物館の概念や機能を拡張させ、博物館運営に多くの人が関わり、取り扱うコレクション対象を拡大させ、博物館活動の領域を地域へ拡張したものであると考える。したがってこれから日本で設立されるエコミュージアムが、以下の3つの役割を担っていくことを期待したい。

① 地域に点在する歴史的遺産の保全と活用

今日の環境問題に対して良好な地域環境を構成する物件を積極的に保全し、歴史的環境が断絶しないように努めること。そしてその歴史的遺産の価値や意味を次世代へ伝えていくために高齢者が子どもたちと語る場を提供すること。

またその展示・教育活動において博物館専門職員が技術を提供すること。そして物の価値とその意味合いを知らせることで、感動とともに見る力呼び起こし身につけてもらうこと。

② 市民活動のネットワークを広げる結節点

各博物館に市民がその活動へ参加できる窓口を設置する。そして博物館の情報をリアルタイムでネットワーク化し公開すること。

またその学際性を活かして市民団体・民間企業・自治体とパートナーシップを組んで調査・研究活動を行うこと。特に既存の博物館と連携を取り合っ事業を行うこと。

③ アイデンティティの形成

市民サイドに立った地域ぐるみの環境づくりに

配慮し、市民が郷土愛を抱けるように支援すること。またそうした生涯学習におけるまちづくりに継続性をもたせ、これから生まれてくる子どもたちがその地域の住民であることを誇りに持ち得るよう努めることである。

註

- 1) 本稿で定義する「博物館」は、博物館活動を行う機関である。博物館活動とは、調査・研究、収集・保存、展示・教育する機能である。したがって博物館は、バランスよく均衡のとれた博物館活動を行うことである。
- 2) 本稿において“エコミュゼ (écomusée)”は、1971年以後ジョルジュ・アンリ・リヴィエールの運動からなるフランス国内の博物館を指すことにする。1996年現在、「エコミュゼとソシエテミュゼ連盟 (Fédération des écomusées et des musées de société)」に加盟している館は70である。その内フランスのエコミュゼは33館である。他は、フランスのソシエテミュゼが33館、ベルギーのエコミュゼが3館、ベルギーのソシエテミュゼが1館である (新井 1996, p.7)。つぎに“エコミュージアム (ecomuseum)”は、エコミュゼの思想が世界に伝播し、設立されたフランス国外の機関とする。理由としてエコミュージアムは、国々の事情に応じてその役割や位置づけが異なっているからである。
- 3) 調査は、筆者が (財) 環境文化研究所の企画団体に参加し、通訳を交えて行った。なお聞き取りの質問項目は以下の4点である。
 1. ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体の歴史と現状。
 2. ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼの起源と特性。
 3. ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼの運営方法。
 4. ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼと自治体やアソシアシオンの関わり。

これらのことをパトリス・ノッテジェム氏：当エコミュゼ・ディレクター (Directeur/Conservateur) をはじめとする博物館専門職員他3名、また市民団体の代表者としてジゼル・ブッテ氏 (「学校の博物館」会長) とポール・ドロー氏 (「運河の博物館」副会長) に対して聞き取り調査を行った。なお特にことわりのない限り2.2~3.3のエコミュゼの運営に関する記述は、ノッテジェム氏からの聞き取り調査によるものである。

- 4) 予備調査として前年 (1996年6月21日) に現地視察を行った。
- 5) ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体は、パリから南東に約270kmに位置する (表2)。その東側に地中海へ流れ込むソーヌ河、西側に大西洋へ流れ込むロアール河、南北に小高い山がある。この地域は18世紀まで貧しい農村であった。しかし18世紀末にソーヌ河とロアール河を結ぶ中央運河 (Centre Canal) の建設が行われ、19世紀末石炭が発見された。そして北部のル・クルゾーと南部のモンソ・レ・ミーヌは、船輸送の利便性を活かして大きな工業都市へ発展していった。今日この都市共同体は、農業、軽工業、重工業における複合的な産業構造を成している。また交通に関して国道70号線や高

表2 ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体の詳細

コミューヌ	面積(km ²)	人口(人)	博物館
Les BIZOTS	21.68	472	
BLANZY	30.05	7642	
Le BREUIL	26.80	3740	
CIRY le NOBLE	33.07	2708	セラミック工場
Le CREUSOT	18.16	28909	人と産業の博物館
ECUISSES	13.38	1783	運河の博物館
MONTCEAU les MINES	16.00	22899	学校の博物館 化石の博物館
MONTCENIS	12.33	2341	
MONTCHANIN	07.82	5860	
PERRECY les FORGE	33.82	2022	ロマネスク様式の教会
POUILLOUX	18.40	816	
Saint-BERAIN sous SANVIGNES	45.06	945	
Saint EUSEBE	21.20	1032	
Saint VALLIER	24.61	9978	
SANVIGNES les Mines	34.88	4919	
TORCY	10.62	4062	
合計	389.47	100398	

- 速道路が通り、パリから南フランスを結ぶフランス新幹線TGVが停まる。
- 6) 「環境界 (milieu)」という概念は、「自然」環境と同時に「社会」環境を喚起する (Dominique Rivière 1996, p.60)。
- 7) 地方自然公園は、フランス国立公園 (Parc National) と異なるものである。それは、その地方の観光による活性化の場、また都会の人々にとってのレジャーの場とされ、都市に近いところにある。フランス政府は、1967年3月1日に施行された法令 (Décret No.67-158) より地方自然公園を位置づけている。また1975年10月24日の法改正 (Décret No.75-983) において多くの地方自然公園を地方自治体の代表者からなる委員会、県及び専門組織によって管理させた。今日フランスには、30の地方自然公園がある (Hubert 1985, p.186) (藤原1997, p.6)。
- 8) 「エコミュゼ」という用語は、1971年ICOMの第9回博物館会議の場で、当時のフランス環境大臣ロベール・プシャッド (Robert Poujade) によってはじめて公式に用いられた (丹青研究所 1993, p.6)。
- 9) フランスの行政体制は、まず一番最小の単位を市町村 (コミューヌ: commune) とし、つぎに小郡 (カントン: canton) や区 (アロンディスマン: arrondissement)、その上に95県 (デパルトマン: département)、その上に22地域圏 (レジオン: région) となっている。なおル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体 (de la Communauté urbaine Le Creusot Montceaules-Mines) は、ブルゴーニュ地域圏 (Bourgogne) に属しており、その中のソーヌ・エ・ロアール県 (Saône et Loire) 内にある。また「都市共同体」は、いくつかのコミューヌをまとめた行政区域で、コミューヌと一番緊密に関わりをもつ単位である。
- 10) ジョルジュ・アンリ・リヴィエールは、エコミュゼの創始者であり、国際博物館会議 (ICOM) の初代ディレクター (1948-65年) でもあった。
- 11) ユーグ・ド・ヴァリンは、1971年に「エコミュゼ」という言葉を考案した。そしてこのエコミュゼの2代目会長 (Président) であった。
- 12) フランスに「アソシアシオンの契約に関する1901年7月1日法 (Loi du 1er juillet 1901 relative au contrat d'association)」がある。この法律は、いかなる人々やグループであっても非営利で自主的な協団体 (アソシアシオン) をつくることを法的に承認し、その公的有用性を認め、かつその活動を保証している。このアソシアシオンは、定款としてその名前、目的、手段、内部組織、その活動する人員の役割を明記し、公表することが義務づけられる。
- 今日ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーヌ都市共同体・エコミュゼのアソシアシオンは、約100名の会員から成り立っている。そのアソシアシオンは、理事会の事務局員を選ぶ。法律において事務局に局長、会計、書記、2人の副局長、副会計、副秘書がいて、その事務局長はアソシアシオンの法律面の責任者になる。
- エコミュゼの設立主体は、このアソシアシオン型の他に、国立公園や地方自然公園が母体となっているもの、またその属しているコミューヌが母体になっているものもある (Joubert 1992, p.3)。
- 13) 例えば「運河の博物館」は、1995年2月1日にエコミュゼとエキュイス (la Commune Ecuisses) 間で協約を結んだ。その内容は、「協約全体の目的と手段」「業務上の約束」、「コレクションの規約」、「財政上の規定」、「更新の決議」である。
- 14) 例えば「運河の博物館」のアソシアシオンは、「運河の淡水」について独自に調査を行い、国内の展覧会でその研究成果を発表して

いる。

- 15) 今日のル・クルゾー・モンソ・レ・ミーン共同体・エコミュゼは、「運河博物館」、「学校の博物館」、「ル・クルゾー・モンソ・レ・ミーン都市共同体・エコミュゼ」における3つのアソシアシオンから成り立つ連合体である。各地域の博物館運営に関するイニシアチブは、(表3)にまとめる。ただし「ロマネスク様式の教会」は独自のアソシアシオンがないのでエコミュゼにより管理され、「化石の博物館」は当館のコンセルバトワールにより運営されている。また「セラミック工場」には、まだ法的に認められたアソシアシオンとして発足していないが、25人の地元住民が携わっている。

表3 運営におけるイニシアチブ

博物館	エコミュゼ	各地域のアソシアシオン
人と産業の博物館	◎	—
運河の博物館		◎
学校の博物館	○	○
化石の博物館		◎
ロマネスク様式の教会	◎	—
セラミック工場	◎	—

- 16) その試みの一つとして神奈川県川崎市で構想されている「(仮)多摩川エコミュージアム」は、その地域住民による環境保全運動とエコミュゼの住民参加による手法が結びつき推進されている。そして地域をまるごと生きた博物館と捉えそこに点在する歴史的遺産を活かしたまちづくり運動へと発展している。そこで市民は、その活動へ参加する仕組みをより確実にし、自ら育てていける地域に根づいた活動が誘発されるシステムを望んでいる。

引用・参考文献

- Alain Joubert. "Les Ecomusees En France, *Museum Data*, 18, Tansei Institute", 1992, pp.1-5.
Alain Joubert. 「フランスから日本へ—エコミ

ュゼ—」、『エコミュージアム研究』、1. 日本エコミュージアム研究会、1996, pp. 29-37.

新井重三「日本型エコミュージアムの未来」、『エコミュージアム研究』、1. 日本エコミュージアム研究会、1996, pp.6-12.

Dominique Rivière. Un Ecomusée Français type; L' Ecomusée de la Bresse Bourguignonne, 『エコミュージアム研究』、1. 日本エコミュージアム研究会、1996, pp. 58-77.

藤原道郎・鎌田磨人・福田珠己「フランスのエコミュージアム—ロゼール山・エコミュージアムとグランドランド・エコミュージアムの事例を中心として—」、『徳島県立博物館研究報告』、6, 1997, pp.1-38.

Georges Henri Rivière. "The Ecomuseum; an evolutive definition", *Museum*, 37 (4), Unesco, 1985, pp.182-183.

Hubert Francois. "Ecomuseums in France —contradictions and distortions—", *Museum*, 37 (4), Unesco, 1985, pp. 186-190.

Hubert Francois. "Historique des écomusées", Georges Henri Rivière, *LA MUSEOLOGIE*, Dunod, 1989, pp. 146-154.

Hugues de Varine-Bohan. "A Fragmented Museum—The Museum of Man and Industry—", *Museum*, 25 (4), Unesco, 1973, pp.242-249.

岩橋恵子「フランスにおけるエコミュージアム運動の歴史的展開とその特質」、『鹿児島女子大学研究紀要』、17 (2)、1996, pp.125-143.

倉田公裕・矢島國雄『新編博物館学』、東京堂出版、1997.

前田千世「エコミュゼに関する一考察—その背景と理念形成から—」、『平成7年度修士論文』、お茶の水女子大学大学院人文科学研究科、1996.

Mathilde Bellaigue-Scalbert. "Georges
Henri Rivière et la genèse de
l'écomusée de la Communauté urbaine
Le Creusot-Montceau-les-Mines",
Georges Henri Rivière,
LA MUSEOLOGIE, Dunod, 1989, pp.

164-165.

西野嘉章『博物館学—フランスの文化と戦略—』、
東京大学出版会、1995。
丹青研究所『ECOMUSEUM—エコミュージア
ムの理念と海外事例報告—』、1993。